私の履歴書

前橋汀子

㉙

カルテット

ベートーベン 挑み続ける

楽器新調、演奏の支えに

小澤征爾さんがサンフランシスコ交響楽団の音楽監督をされていた頃、演奏を聴いてもらったことがある。まだ私は20代だった。「ソリストでやっていきたいのかもしれないけど、室内楽の勉強が大切だよ。音楽の原点だからね」と小澤さんは言った。

室内楽の中でも原点といえるのが弦楽四重奏だ。当時の私はせっかくジュリアード音楽院で弦楽四重奏を学んだのに、その重要性に気づかなかった。小澤さんの言葉は核心を突いていた。

実はジュリアードで学んでいた頃、その弦楽四重奏で苦い経験をしている。アルバイト募集の掲示板で「カルテット求む」の紙を見て、気軽に出かけた時のことだ。

依頼主はマンハッタンの豪邸に住む老紳士だった。趣味でバイオリンを弾き、名器ストラディヴァリウスを持っている。「これを弾いて」と渡された楽譜はベートーベンの弦楽四重奏「ラズモフスキー」の第1番。いきなり弾けるほど簡単な曲ではなく、私は弾いたことも聴いたこともなかった。老紳士は私に第1バイオリンを任せ、自分は第2バイオリンを弾いてディナーのゲストに聴かせるつもりだった。あれほど冷や汗と恥をかいた経験はない。

時は過ぎ、弦楽四重奏団「東京クワルテット」のチェリストで桐朋の同級生でもある原田禎夫さんがグループを離れたと聞いた。室内楽の大切さに目覚めていた私は彼を訪ね、一緒に弦楽四重奏を弾いてくれないかと頼んだ。

最初はあまり乗り気ではなかった原田さんを口説き落とし、第2バイオリンは久保田巧さん、ビオラは川本嘉子さんにお願いして「前橋汀子カルテット」が誕生した。最初のコンサートは2014年。ベートーベンの弦楽四重奏曲から3曲を演奏した。

私はベートーベンの後期、特に亡くなる前の数年に作られた曲に心引かれている。耳が不自由になりながら作曲を続けた楽聖の思い、人生の答えというべきものを感じるからだ。

バイオリンで実際に演奏できる後期の作品は弦楽四重奏の6曲だけ。ソロの演奏とは全く異なるし、技術的にも難しいから、私は常に楽譜を持ち歩いて勉強している。カルテットは来年1月に東京で公演し、ベートーベンの後期とラズモフスキーの弦楽四重奏曲を演奏する予定だ。

前橋汀子カルテットのステージ（左端が筆者）

近年の私は前向きな姿勢で演奏に臨めていると思う。それは15年前から使っているバイオリン、1736年製のデル・ジェス・ガルネリウスに助けられている面が大きい。楽器だけで演奏の良しあしが決まるわけではないが、バイオリニストにとって楽器とはそれほど重要な存在なのだ。

ロンドンの楽器商で試奏した瞬間、衝撃を受けた。当時の私は2台のバイオリンを所有し、十分に満足していた。デル・ジェス・ガルネリウスはその2台を足した値段だった。私は還暦を迎え、今後どうすべきか悩んでいた時だ。1台は老後の資金にとも考えていた。

迷いに迷った末、2台を手放し、この1736年製のデル・ジェス・ガルネリウスを手に入れた。これを弾けば、さらに階段を一つ上がれると確信したからだ。新しい楽器はすっかり私になじみ、常にインスピレーションを与えてくれる。あの時の決断が今の私の演奏を支えてくれている。

（バイオリニスト）

掲載日 2018年10月30日 日本経済新聞 朝刊 40ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。